此ニ至ラス 故ニ最モ安心シテ同盟スルヲ得ヘシ 且同盟シタル以上は容易ニ他國ノ手出シハ成ラス 最モ安心シテ内治ノ改良ヲナスヲ得ヘシ 獨塊共ニ日本ニ同盟ノ貴キヲ知りテ日本皇族ノ來歐ノ時ハ之ニ賓待スル事恰カモ帝王ニ對スル如シ 外の皇族ニハナサヌ事ナリ 此際ニ在テ日本ノ大使モ公使モ一人モ歐洲ニナキ事ハ何事ソヤ(此辺耳痛シ) 日本ノ外交政畧ハ其半ハ東洋ニ決シ 其半ハ歐洲ニ決ス 故ニ中原ニ日本ノ公使ナキ事ハ拙キ事ナラスヤ 亦日本ノ内閣ハ外国事情ニ明カナラス 故ニ一個俊才ヲ自分ノ門ニ派シテ歐洲ノ大勢ヲ毎日記載シテ日本ニ送らせ 日本ノ人民モ能ク目下ノ焦急ヲ知りテ政府ト共ニ國家ヲ守ルノ精神ヲ起サセサルヘカラス云

在歐日本大使若クハ公使の重任タル事ハスタイン翁の云フ迄モナク兼テ閣下の高按ニモ有之 若閣下カ御帰朝之上萬萬一再タヒ外出の事モ候ヘハ奥國御駐紮の事可然ト存候 是ハ新ランキ話ニモ無之 少々クドギ様ニ候ヘ共愚感ヲ展ヘ候ノミ 且又當地ハ美人モ山ノ如ク 音楽モ精良ナリ 美術モ左程悪シからず候間 外よりは宜敷ト存候 以上餘リ失敬ナル事 御叱正奉仰候

此後二週間後ニ羅馬ニ可參候 小生全ク無事ニ候 御休神被下度 卓々頓首

三月二十一日 在維納府 天心生拜 乱筆拝謝

成海公閣下 フエノルサハ今ニ巴里有之 病氣少シは宜敷方ニ候 Henry

Adams 氏御逢ヒ候ハ、宜敷奉願候 ミスボツジ君ハ如何ニ候哉 ミス、バンクロフト君モ同様 阿々

② 岡倉覚三の美育の提唱

左の一篇は岡倉覚三が東京美術学校開校直前に『教育評論』第二、第三号(明治二十一年十月一日、同年十一月一日)に寄稿したもので、筆名は天心子とある(目次には岡倉覚三と本名が記されている)。わが國に欧米の美育論(教育は知育、徳育、体育、美育をもつて完全なものとなるという説)を紹介したのは、金子一夫氏のご教示によれば、高嶺秀夫の『新教育論』(明治十八年。普及舎。高嶺の友人であるニューヨークの教育家ジョホノットの著書の翻訳)が最も早いものの一つだといふが、本篇における岡倉の美育の提唱もこの書と何らかの關係があるかもしれない。本篇は『岡倉天心全集』(昭和五十四〜五十六年。平凡社)にも収録されておらず、また、これまで一般には知られていなかったものである。岡倉および日本近代美術教育史の研究資料として貴重であると思われるので、ここに紹介する。

○美育ニ關スル注意 天心子

美術ノ神韻ハ之ヲ論セザルヲ以テ善シトセン歟、口ヲ開ケハ忽チ第二義ニ墮ルノ憾ナキニ非サルナリ、下界ノ風塵ニ任シテ、魂ヲ兜率天上ニ遊ハシメ、荊刺林中ヲ披テ、一路ノ花影ヲ踏ムハ、是則高雅秀麗ノ別天地ナリ、意言外ニ溢レテハ、剩章殘句モ人生千古ノ哀樂ヲ寄セ、氣筆先ニ動テハ、寸縑尺幅モ水雲萬里ノ杳茫ヲ顯ス、有

聲ノ畫ト評シタル語ハ、大ニ趣キアレトモ、恐ラクハ詩歌ノ範圍ヲ
檢束スルノ弊アルヘシ、無聲ノ詩ト題シタル人ハ、能ク丹青ノ三昧
ニ入りタルモノ、如シト雖モ、顧フニ仙凡ノ區別、雅俗ノ差異、其
間一髮、唯タ拈華微笑ノ餘地アルノミト云フモ可ナラン。

泰西ニ在テハ、風雅ヲ論スル者、希臘ノ古哲ヨリ、近世勾邊哈兒
博士華兒士曼ノ諸名儒ニ至ルマテ、二千余年ノ風光ヲ消磨シテ、未
タ曾テ一定ノ基礎ヲ確定セス、東洋ハ古來力ヲ文藝ニ致シ、詩文ノ
氣格ヲ痛論シテ餘ス所ナク、一字一句ヲ分析シテ、殆ト枝葉ニ流ル
、ノ弊アルカ如シト雖モ、亦精細周到セリト云ハザルヲ得ズ、又本
論ニ於テ特ニ論述セントスル有形美術ノ上ニ於テモ、謝赫邊廡郭忠
恕等ノ鑑識卓論、實ニ少シトセス、六法ノ精微、三長ノ緻密、書畫
ノ同致、古今ノ優劣、能ク其眞趣ヲ得タリト雖モ、全體ノ氣運、興
廢ノ原理等ニ付テハ、立論偏頗ニシテ、未タ雅學ヲ完成シタル者ア
ラス、蓋シ從來流派ノ性質ヲ察スルニ、天真爛漫無形ヨリ有相ニ移
ルノ間、知覺的ノ作動アルニ非ス、唯タ一時ノ好尚一代ノ精神ヲ知
ラス識ラス、題表スルモノナリ。故ニ其壯快ナルモノハ、放逸散漫
ニ失シ、其爽直ナルモノハ、強橫凝結ニ流レ、其和雅ナルモノハ、
微弱纖巧ニ陥リ、其精巧ナルモノハ、刻飾小碎ニ失フ、未タ曾テ完
璧ヲ磨出シタルモノヲ見サルナリ、吳道子季伯時光長雪舟ノ如キ
ハ、暗ニ美術ノ眞相ヲ認メタル人ナルヘケレトモ、唯タ自身ノミ之
ヲ認メ得タルモノニシテ、之ヲ弟子ニ傳ヘス、又弟子ニ傳フルコト
能ハサリシナラン、巴里ノ畫伯羅華樹先生ノ語ニ「美術ノ波力打寄
セテ岸ヲ洗フ濱邊ハ人ノ見知ラヌ處ニアリ若シ人一度其岸ニ遊フト
キハ再塵界ニ戻ラントスルノ念ヲ起サル、ヘシト 又磊落ナル張船

山ノ警句ニモ、笑他正色淡風雅、戎服朝冠對美人、其言フ處異ナレ
トモ、歸スル處ハ一ナリ。

要スルニ美術ヲ論スルノ難キハ、前陳ノ如ク其氣韻ノ高遠幽微ニ
シテ、専ラ感情ニ訴フルモノナレハ、科學ノ方則ヲ以テ、之ヲ推窮
スルノ困難ナルノミナラズ、其他各種ノ妨害極メテ多シトス、第一
ニ文學上ノ文字ハ、美術的ノ事實ヲ代表スルニ足ラサルヲ以テ、言
論最モ不便ニナルカ爲メ、遂ニ古來錯誤ヲ來スコト甚タ多ク、互ニ
意義ヲ混問スルノ病アルヲ免カレス、英國ノ鑑賞家羅士琴氏ノ文章
流麗、造語纖濃ナルモ、王維郭熙ノ畫論、風調清深ニシテ、細ヤカ
ニ物象ヲ形容シ、擺去拘束ノ能ク其妙ニ至リタルモ、遂ニ畫趣ノ一
般ヲ敘述スルニ過キス、濃淡ノ配置、遠近ノ照映、線皴ノ氣運等、
總テ畫相ノ上ニ至テハ、更ニ一言モ吐クコト能ハサルナリ、蓋シ詩
境ト畫境ノ互ニ區別アルニ因レリ

又第二ニハ美術ト精神(則チ意匠ヲ云フ)美術ノ形相(則チ畫格
刻格等ヲ云フ)トヲ混同スルノ弊是ナリ。固ヨリ美術ナルモノハ、
精神形相合シテ其體ヲ得ルモノナレハ、之ヲ分離兩斷シテ、愛翫鑑
賞スルハ、素ヨリ出來ヘカラサル事實ナリト雖トモ、精確ニ其組織
ヲ研究スルモノハ、宜シク之ヲ分析シテ論セザルベカラズ。元明以
下ノ論者動モスレハ其精神ノミヲ追慕シテ形相ヲ求メス、筆墨ヲ離
レテ畫ノ心髓ヲ得ント試ミタリ。其弊ヤ延ヘテ近世ノ南宋ニ及ホ
シ、大雅蕪村ハ兔毛角モ、今日ニ在テ文人畫ト稱スルモノ、如キニ
至テハ、滿幅ノ塗鴉墨痕狼籍其神意ノ何所ニ在ルカヲ知ル能ハサル
モノアリ。又一方ノ病ハ唯タ其形似ニ拘束セラレテ意匠ノ如何ヲ問
ハス、實物以外ニ師匠ヲ設クルコトナク、彼ノリヲナルドダビチチ

カ所謂「丹青ノ極點ハ鏡ニ至テ畫ク」〔一〕ノ主義ヲ守リ、無味無主義ノ寫眞畫ヲ描クニ至ルナリ。泰西ノ惡畫四條派ノ末流杯ニ至テハ、孰レモ大ニ此趣アリト云フヘシ。故ニ神韻ト骨相トノ區別ヲ正クシテ、美術ノ全豹ヲ認メンコト極メテ必要ナリ。

加之實際ノ經驗ニ富メル美術ノ大家ハ、往々深く祕シテ其說ヲ售ラス、又ハ文學上ノ能力ナキカ爲メ、其著論ノ世ニ出タルモノ甚タ稀少ナリ。之ニ反シテ廣ク世ニ行ハル、モノハ、概子未タ其蘊奧ヲ叩カサル者ノ手ニ成レルカ故ニ、祕訣ヲ示スニ足ルモノナケレハ、隨テ隔靴ノ憾ナキヲ得ス。美術ヲ論スルノ困難既ニ多シ、況ンヤ實際之ヲ教育ニ施設シ、之ヲ工藝ニ應用スルニ至テハ、其公平ヲ期スル一層困難ナラサルヲ得ンヤ。豈廣ク過去ノ沿革ニ鑑シ、今來ノ須要ニ應シテ、深ク考慮セサルヘケンヤ。

此際ニ當テ、世人カ美術ニ對スルコト、何ソ其宜シキヲ失ヘルノ甚シキヤ。一方ニ在テハ、冷淡ナル人士ハ、美術ノ問題ヲ避ケテ、片言隻口ヲ出タシテ、是非ノ海ニ棹スコトヲ好マス。其甚シキニ至テハ、或ハ之ヲ無用視シ、或ハ之ヲ玩弄物視シ、或ハ文弱ニ流ル、ノ弊害アリトシテ、更ニ其消長ニ關心セサル者鮮シトセス。實ニ人世ノ關係ト、生活ノ須要トニ照シテ、笑フヘキノ甚シキモノニ非ルヲ得ンヤ。然レ共、亦一方ニハ勇壯ニシテ、世ニ云フ活潑有爲ノ人士ニ在テハ、美術ノ眞味ヲ盡ク解得シタリト自任シ、無造作ニモ猥ニ風雅ヲ談シ去リ、博物館ニ共進會ニ、喋々囂々形似ノ眞否、風趣ノ有無、筆意用墨ニ至ルマテ、一ツトシ〔テ〕其齒牙ニ上ラサルハナク、激昂頓挫毀譽半ハシ、經驗ノ如何ニ拘ハラズ、知識ノ有無ニ關セス、只自個ノ僻習ヲ推シテ、思フカマ、ニ其品評ヲ試ミテ、毫

モ憚ル處ナク、己レノ好ム所ハ之ヲヨシトシ、己レノ好マサル所ハ之ヲ惡シトス。其繪畫ヲ購フニ當テヤ、恰モ緣日ニ植木ヲヒヤカスニ同シク、無理ニ價直ヲ直切ルカ如キモノナリ。其之ニ品評ヲ下スヤ、猶割烹店ニ上リテ、調肉ノ巧拙ヲ論スルニ均シ。夫レ斯ノ如キ乾燥無味ナル腦髓ノ中ニ、仙雲飄渺タル騷懷、世外塵表ノ高致ヲ涵養セントスルハ、才壁ノ沙場ニ、金莖一杯ノ玉露ヲ濺クト何異ナラシ。

今夫レ社會ノ必要ニ基キ、教育上ニ於テモ、益々美育ノ開達ヲ緊急ナリト認ムルノ時機ニ際シ、冷淡ニ之ヲ放任スルハ、素ヨリ不可ナルノ甚タシキモノナレ共、亦着意ニ之ヲ檢束スルハ、均シク不當ノ策タリ。宜シク其精神ニ基キ、其形相ヲ考ヘ、戰々競々能ク靈活幽微ノ氣運ヲ發生セント勉メサルヘカラス。本邦學制頒布以來、諸學校ニ圖畫ノ設ケアリテ、教育行政部既ニ其端緒ヲ開キタリト雖也。實際諸學校ニ圖畫ヲ施行スルノ方法ハ、果シテ能ク其目的ヲ達スルコトヲ得ヘキ乎。果シテ美術思想ヲ喚發シ、高雅秀麗ナル趣味ヲ涵養スルニ足ルヘキ乎。各種工藝ノ進歩ヲ促カシ、國家經濟ノ一原素タルヲ得ヘキ乎。視覺ヲ靈敏ニシ、他ノ能力ノ發達ヲ補助スルニ足ルヘキ乎。教員養成ノ道、既ニ其準備ヲ得タル乎。古人ノ大作ヲ示シ、高尚優美ノ嗜好心ヲ養フヘキ標本ハ、業ニ既ニ整頓シタル乎。美術ヲ愛スル公衆ノ、好尚ヲ掌理スヘキ美術博物館ハ、既ニ設立サレタル乎。幼稚ノ平生ニ接近スル玩具繪本ハ、果シテ能ク教育（殊ニ美育）ノ目的ヲ満足セシムルニ足ルヘキ乎。讀本ノ挿畫掛圖ノ繪様、果シテ能ク其趣キヲ得タル乎。

要スルニ、本邦ノ教育ハ、智育最モ進ミ、體育之ニ次ク、昨今ニ

至ツテ、德育ノ論大ニ盛ンナリト雖モ、美育ニ至ツテハ、寂々寥々更ニ其整理ニ着手セサルモノ、如シ。或ハ之ニ着手セント欲スル人士ナキニ非サレトモ、却テ亦躊躇スル傾向ナキニシモ非サルナリ。故ニ予ハ本論ニ於テ、特ニ美育ニ關スル注意ノ諸點ヲ提出シ、聊カ教育家諸君ニ質ス所アラント欲スルナリ。

③ 東京美術学校創立に関する補足資料

本書第一卷第一章第二節104〜106頁の記述に關し、青木茂氏、瀧梯三氏の御教示によりさらに調査した結果、新たな資料の発見があったので、ここに掲載する。明治二十年秋に欧米視察から帰国したフェノロサ、岡倉覚三らの美術学校設立準備活動に対し、欧化派が反対運動を起こし、文部省に動揺が生じ、そのために貿易協会が再度岡倉らの支援に立ち上がり、次いで岡倉らの強力な支持者である九鬼隆一が帰国して函書頭となるまでの経緯を知る手掛りとなるだろう。

●フェノロサ氏 文部省雇米國人フェノロサ氏は同省の圖書取調掛主幹岡倉覚三氏と共に圖書取調の爲め先年歐米諸國へ赴むぎ去る十三日歸朝せしが恰も此度文部省官制の改正に際して美術學校を創立することに成りしに付き右兩氏ハ其の創立取調委員を命せられしと

(明治二十年十月十五日『郵便報知新聞』)

◎美術取調 文部省雇米國人フェノロサ氏并に圖書取調掛岡倉覚三氏は圖書取調の爲め歐米各國を巡廻して去る十二日歸朝し以後ハ美術學校創立事務を擔任するよしなり

(同年同月十七日『時事新報』)

○東京美術學校 同校設立のことに付てハ種々議論ある由なるがフェノロサ岡倉兩氏にハ非常に盡力し居る由なり 又同校ハ當分帝國大學植物園の側なる舊圖書取調所を以て之に充てらるゝよし

(同年同月二十日『朝野新聞』)

●東京美術學校 文部省にて今度創設する東京美術學校ハ小石川區植物園構内の舊圖書取調掛官舎を其盡用ふる筈なりしが又た他に新設せんとの議も起り目下尙ほ協議中なり 尤とも同校創立取調委員なる同校幹事岡倉覚三氏は差し向き右圖書取調掛官舎へ出頭して事務を執り又た本省文書課へも出頭して種々取り調べ居れりと

(同年同月二十一日『郵便報知新聞』)

○美術學校 文部省にて美術學校を設置することハ豫て記るせしが曩に歸朝せし岡倉幹事御雇フェノロサ氏等の盡力に依り其の方案規則も整頓したれば來春までにハ開校の見込なりと云へり

(同年十二月二十一日『朝野新聞』)

建言書

文部三等技師山口半六 工科大学教授辰野金吾 文部大臣子爵森有禮閣下ニ建言セン 半六等常々⁽¹⁾美術學校設立ノ拳アラン⁽²⁾ヲ希望スル已ニ久シ 而ソ文部省モ亦向⁽³⁾キニ⁽⁴⁾見アリテ今ヤ新ニ東京美術學校ヲ創立シ以テ美術教育ノ業ヲ企圖セラル 誠ニ半六等ノ